

## 近世尾張藩の劍術に関する一考察

加藤 純 一

### 一 はじめに

筆者は、尾張藩における新陰柳生流に関して研究を進めている。この新陰柳生流は、十六世紀末に江戸と尾張の二つの地に分れ、それぞれ独自の流儀を展開していく。特に江戸の柳生家は、徳川將軍家の兵法師範役の任に就き、その流は一刀流と共に將軍家の御流儀にもなった。一方尾張の柳生家はというと、尾張藩藩主の徳川家と共に発展し、流祖上泉秀綱の教えを守り、地道な活動を続けている。

ところで、近世の尾張新陰柳生流の「勢法(かた)」の変容を明らかにしていく上では、この時期の尾張藩における劍術に関して、その存在流派の確認と、生成過程並びに発展過程等を明確にする必要性にかられる。

そういった折、一昨年と昨年の二回、名古屋市の蓬左文庫にある資料を閲覧した際、この時期の資料を若

干入手することができた。そこでそれらを基に、近世の尾張藩における劍術の諸様相について明らかにしようを試みた。

なお、蓬左文庫で得られた資料は次の通りである。

武芸師範之輩並門弟人数書上帳

師家姓名

張藩武術師系録

尾張殿師役帳

### 二 資料の分析

右記の資料には、その著された時期が明記されていないものが多い。そこで、ここではこれらの資料のうち、著作時期の不明瞭なものに関して、その資料内容からその時期を限定していくことにする。

(一) 武芸師範之輩並門弟人数書上帳

この資料に関しては、唯一その著作年月日が記され、享保八年卯七月に著されたことがわかる。この書

には、尾張藩の武術流派名が記され、射芸、居合、兵法剣術といったジャンルごとに、竹林流、関口流、無二流などの流派名が列記され、それぞれの流派の師範とその門弟の人数が克明に記されている。

## (二) 師家姓名

この書も『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』同様に、尾張藩の武術諸流の名称と師範の名が記されている。

さて、先の『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』の柳生流の項には、柳生忠次郎、猪谷只四郎といった人物の名が見られる。『御家中はしり廻り』によれば、この只四郎は十六歳から指南を始め、猪谷流を開流したとされている。<sup>(1)</sup>したがって、この『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』が著された享保八年は、猪谷流の開流以前ということになる。そこでこの『師家姓名』を見ると、ここには猪谷流という項が設けられ、猪谷忠蔵(只四郎の子)という名が見られる。つまり、このことは、『師家姓名』は『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』より後に著されたことを示している。

また、ここには玄流という流派名が記され、服部某という師の名が見られる。この玄流は『武芸流派大事典』によると、石来清次郎が宝暦頃に開いた流派であ

ることがわかる。<sup>(2)</sup>その系図を辿ると、石来の門弟の一人に服部正勝という人物名が見られるが、このことは、この書に見られる服部某は、正勝かその子の正時にあたると推測される。この服部家が、いつ頃玄流を継承したのかは定かではないが、いずれにしろこの『師家姓名』は玄流が記されていることから、宝暦以後に著されたということがいえよう。

## (三) 張藩武術師系録

この書は、その名の通り各流派の系図が記されているものである。その「影之流」の項を見ると、神影流、新陰流、柳生流、疋田影流、心貫流といった流派名が記されており、そのなかの尾張柳生家の系図を辿っていくと、その最後には柳生又右エ門蔵之の名が記されている。この蔵之は、『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』『師家姓名』に記されている柳生忠次郎(蔵傳、新陰柳生流第六代)の孫にあたり、十五歳の時(文化元年)に父親の蔵春(第七代)から印可を受け、新陰柳生流第八代を継承したが、同九年に逝去した人物である。

したがって、この書は『師家姓名』よりも後に記され、新陰柳生流の蔵之の名が見られることから、文

化元年から同九年の間に著されたものと考えられる。(他流派の師家名の所にその指南開始時期が記されているが、文政以降の年号は見られない。)

#### (四) 尾張殿師役帳

この書は、各流派の師範の石高が記されているものである。この新影流の項を見ると、柳生新六(厳政)という名が見られる。この人物は先の『張藩武術師系録』に見られた柳生厳之の弟にあたり、文政四年に新陰柳生流第九代厳久(厳之の子)の他界に伴って、新陰柳生流第十代となり、嘉永二年に引退、その際厳久の子厳蕃にその座を譲っている。したがって、この書は『張藩武術師系録』より後に著されたことがわかる。

また、同書の新陰流の項には市橋彦太郎という名が見られるが、この人物は、天保二年に著された『諸稽古場入門循記文』<sup>(3)</sup>によれば、文政十一年に入門し、天保十一に目録を授けられていることがわかる。

以上のことから、この『尾張殿師役帳』が著された年を推測すると、市橋が目録を授けられた天保十一年以降で、柳生厳政が引退した嘉永二年以前ということがいえよう。

以上、四資料の著作時期をまとめると、次のように

なる。

『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』(享保七年八月)  
『師家姓名』(宝曆以降、文化元年)

『張藩武術師系録』(文化元年、九年)

『尾張殿師役帳』(天保十一年、嘉永二年)

### 三 劍術の諸様相

ここでは、近世を前期、中期、後期の三期に区分し、それぞれの時期の劍術様相について見ていくことにする。

#### (一) 近世初期

尾張藩では、近世初期において刀を扱う術を示す言葉として「劍術」と「兵法」という言葉が存在していた。そして、これらは区別して用いていたようである。『尾張御家中武芸はしり廻り』を見ると、そこには次のようなことが記されている。

劍は物をつんざき破るの器なる故、劍術とのみいふ時は物を割破るの道也。——中略——劍術といふ時は人を切術にて、兵法といふ時は人に切られざる術也。——中略——兵法劍術ともに詰り身を全ふして忠を尽さんと欲する所は同じ。<sup>(4)</sup>

このように、剣術とは人を切る術を指し、兵法とは人に切られない術を指していた。しかし、ここに記されているように、忠義を尽くすためにそれをを用いるといった点においては、同意のものと解釈されていたことがわかる。

この『尾張御家中武芸はしり廻り』は、その名の通り尾張藩における武芸について書かれた書物であるが、そのなかの「兵法の事」の項を見ると、次のようなことが書かれている。

古は御国の兵法は柳生流、武蔵流のみ有て、其他は一向に無之<sup>5)</sup>

このことは、「兵法」の最初の流派は、柳生流と武蔵流の二流であったことを示している。しかし、この事実を語っている時代については甚だ不明瞭ではあるが、宮本武蔵が尾張を後に熊本へ赴いたのが寛永十七年（一六四〇）であり、柳生宗厳が上泉秀綱から新陰流を継承したのが永祿八年（一五六五）であることから、戦国時代から近世の初めの頃の時期を指しているものと考えられる。

なお、『御家中はしり廻り』を見ると、

江戸新陰流村山作右衛門宗次が流を望月隼人善勝

に伝へ、夫より市橋新内、河野忠兵衛矩明が家に伝へ<sup>6)</sup>

と記されている。この村山作右衛門宗次は柳生宗厳の門弟の一人であることから、この時期に分派した江戸新陰流が尾張藩に逆流入していることがわかる。

一方「剣術」の方であるが、『尾張御家中武芸はしり廻り』の「剣術の事」の項には次のようなことが書かれている。

此伝御国に、始る事は、田島助十郎と云もの制剛流剣術を撰出し、猪谷洪右衛門と云者に伝之。洪右衛門兼て柳生蓮也（蓮也の誤り）の門下に出傑し、後又福富天然子にも二刀兵法を学び、終に剣術の一家を見開く。——中略——其子同姓唯四郎十六歳より指南を始む。是を猪谷流剣術と云。<sup>7)</sup>（一）内筆者

このように、「剣術」は制剛流と猪谷流が最初であったことがわかるが、この記述が示す時期を考えると、制剛流を開流した田島助十郎は、新陰柳生流第三代柳生蓮也斎厳包（宗厳のひ孫）の門弟である、猪谷洪右衛門に制剛流を教授していることから、蓮也と同期の人物であることがわかる。したがって、この「剣術」はさきの「兵法」より後に登場してきたジャンルであ

るといえよう。

(二) 近世中期

ここでは、『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』並びに『師家姓名』を基に、この時期の劍術流派について明らかにしていくことにする。

まず、『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』の「兵法劍術」の項目を見ると、そこには次のような流派名が見られる。<sup>(8)</sup>

柳生流 無二流 円明流 行詰流  
 佐々木流 新影流兵法 武蔵流兵法

ここに見られる流派について若干の補足をしておくと、無二流、円明流、武蔵流兵法は、みな宮本武蔵を流祖とする「二刀」系列の流派である。『御家中武芸はしり廻り』によれば、無二流は山田左近太夫盛次が流祖であり、その門弟に彦坂八兵衛忠重がおり、彼は後に竹村与右衛門頼角に二刀を学び、武蔵正流直道円明の兵法を受け継いでいる。<sup>(9)</sup> なお、『武芸師範之輩並門弟人数書上帳』に記されている武蔵流兵法師範の一色茂左衛門という人物は、円明流の道統にその名を見ることができず、どういった系統でその流派を受け継いだのかは明らかでないが、『張藩武術師系録』の円明

流の項に享保五年より同流の師であることが明記されているので、武蔵流兵法も円明流系統の流派であるといえよう。(資料1参照)

また、行詰流に関しては『御家中武芸はしり廻り』に、

大山には雨山府右衛門正家は行詰流を藤井床兵衛貞利に伝へ指南せり。<sup>(10)</sup>

とあることから、この流派は尾張藩の隣の大山地方から流入してきた流派であることがわかる。同様に佐々木流も、

佐々木大学が流を山田彦内が家に伝へ<sup>(11)</sup>とあり、この佐々木大学は武州出身であることから、この流派も尾張藩に流入してきた流派であることがわかる。

なお新影流についてであるが、この流派は大塩与左衛門という人物が師範を務めている。『張藩武術師系録』を見ると、その系譜から柳沢丞右衛門の系統にあることがわかるが、(資料2参照)『御家中武芸はしり廻り』には、

新陰流は柳沢丞右衛門良道より今は山高孫兵衛が家に伝りぬ。<sup>(13)</sup> (『張藩武術師系録』には良屋とある)と新陰流という名称が使われている。これは時代的な

背景から、大塩が「影」という文字を「陰」に代えて継承したものと考えられる。<sup>(14)</sup>

次に『師家姓名』に見られる流派であるが、ここには以下のような流派名が見られる。

円明流 猪谷流 新陰流 新影流 貴直流 融和流 佐々木流 玄流 行詰流

この書を見るかぎり、先の武蔵流、無二流といった宮本武蔵の系統の流派が円明流のみになり、柳生流が新陰流に代わっている。また、近世初期に「剣術」のジャンルに属していた、制剛流の系統を受け継ぐ柳生の門弟の猪谷家が、新たに猪谷流を開流していることがわかる。

ここで、新興流派について若干の補足をすると、貴直流は紀州の稻垣十郎左衛門貴直が流祖で、兵法、棒、長刀を用いる流派である。また、融和流は下野國の伊藤伴右衛門高豊が流祖で、「平法」というジャンルに属していた。したがって、この二つの流派はいずれも他国から流入してきた流派ということがいえよう。なお、この「平法」に関してであるが、『御家中武芸はしり廻り』によると、

高豊は武蔵流を伝て指南せし物也。浅野戸一左衛

門勝重其伝を望といへども、二刀兵法の道は故あつて伝へ難きゆへ、潜に一流を編みて是を伝ふ。一中略—此術は太刀業なれども、世にいふ兵法共、剣術共少し意味ちがふが故に平法と云。尤今素肌(15)の勝負或は品物木刀の試合には其相違も之れ有間敷、上手の方勝べき事なれども、平日喧嘩刃傷の用に作り立し平法故、甲冑に身を堅めて戦場を働為に作り立し兵法とは其意味相違有べき事也。故に平法といひ伝る事<sup>(15)</sup>

とあり、武蔵流の二刀系統を受け継ぐ流派ではあるが、その開流の意味が戦を想定して作られた「兵法」とは違い、日常の小さな争いに役立つために作られたものであることがわかる。

次に玄流についてであるが、『御家中武芸はしり廻り』の「大太刀」の項には、以下のような事が記されている。

大太刀は石来清次郎四迷と云者父石黒善太夫重四に武蔵流二刀兵法の道を学ぶといへども、終に一流妙所に至ることを不得して潜に玄流と号して大太刀を使ふ術を作り出し、門下に伝ふ<sup>(16)</sup>

そして、『武芸流派大事典』には石来清次郎四迷が宝

暦頃に開流したと記されているので、それ以後玄流が尾張藩に広まったものと考えられる。

このように、近世中期には近世初期に見られない新たなジャンルが生れ、また、他国の流派が流入してきていることがわかる。

### (二) 近世後期

ここでは、『尾張武術師系録』並びに『尾張殿師役帳』を基に見ていくことにする。

まず『張藩武術師系録』に見られる流派であるが、ここに記されている流派名は次の通りである。

影之流 (新影流・新陰流・柳生流・疋田影流・心貫流) 円明流 行詰流 佐々木流 猪田流 玄流 貴直流 融和流 新外他流 大神流

このうち、新外他流はその系図から一刀流系統の流派であることがわかり、また大神流は「初学円明流猪谷流而起一流号大神流」と記されていることから、尾張藩で生じた流派であることがわかる。新陰流系統に関しては、それらを総称して影之流と表し、疋田影流、心貫流の名も列記されているが、これらの流派が尾張藩に存在していたということは『張藩武術師

系録』の系譜からはいえない。(資料二参照)

次に、『尾張殿師役帳』に見られる流派であるが、そこには次のような流派名が記されている。

円明流 神影流 新陰流 新影流 猪谷流 一刀流 貴直流 行詰流 融和流 玄流 佐々木流

これを見ると、この時期新陰流系統の流派名が混同されて使われていることがわかる。例えば、ここに見られる新陰流は、本来は尾張柳生家に伝わる流派を指していたが、ここでは近世初期に尾張藩に流入した江戸新陰流系統を指している。そして尾張柳生家の流は新影流と称され、柳沢良屋の神陰流が神影流と記されている。(資料二参照)

また、一刀流の名が見られることも一つの特徴といえよう。一刀流(特に小野派一刀流)は、新陰柳生流と共に徳川將軍家の御流儀になった流派で、主に江戸を中心を広まっていた流派である。この流派はその後分派が進み、いくつかの派に分かれてそれぞれの流で発展、展開されていくが、なかでも中西派は近世中期頃から「しない打ち」稽古を行うようになり、今までの「かた」稽古で得られない実戦的な要素を取り入

れている。なお、ここに見られる一刀流は何派に属しているのか明記されていないため、どういった経路で尾張藩に流入してきたのかを明らかにすることはできない。

この二つの資料を基に、この時期の尾張藩剣術の特徴を挙げるとすれば、今までの「かた」稽古を中心とする流派の他に、「しない打ち」稽古を行う流派が出てきたということであろう。剣術界においては、近世中期頃から「かた」稽古における「かた」の形骸化が進み、たんなる形のみの稽古が横行し、それに伴う実践性の欠如が指摘されていた。それはもちろん太平の世に伴う社会の安定や、戦国時代に比べて戦が極端に減ったことも原因の一つであろう。そういった傾向のなか、一部の流派が防具を考案し、木刀にかわって「しない」を使い、実際に打ち合う稽古を行い始めた。これが一般的に「しない打ち」稽古と呼ばれるもので、それを「かた」剣術に対して「しない打ち」剣術とも呼ばれている。

この「しない打ち」稽古は、江戸を中心に広まっていったが、この時期尾張藩にもその傾向が現れ始めている。その一つが玄流の「大太刀」の技である。『張

藩武術師系録』には、次の様なことが記されている。

大太刀術之中、劍法品柄打ノ業ヲ屬メ伝之

近來大太刀ト与兵法ニ流二分テ相伝ノ師モ亦有之

このように、玄流では「大太刀」の中に「しない打ち」の技が含まれ、「兵法」（ここでは「かた」稽古を指すと思われる）と分けて師がそれぞれを伝授するといった形態を取っていることがわかる。実際にその系譜を見ると、吉田勘之丞某は「兵法」を吉田久之丞重米に、「大太刀」を高橋鉄藏義郡にそれぞれ分けて相伝している。そしてその高橋鉄藏は文化四年に「大太刀」の免許を受け、同五年三月に師範となっている。

（資料三参照）この玄流の場合、元々「大太刀」の術を中心にしていた流派であったが、当時の社会的影響を受けて、その「しない打ち」稽古を「大太刀」のなかに取り入れていったものと考えられる。同様の例は新陰柳生流にも見られる。その詳細は拙著『尾張藩新陰柳生流の勢法について』<sup>18</sup>に譲るが、この時期新陰柳生流の兵法補佐家出身である長岡房成という人物が「試合勢法」という二百十九本もある「かた」を考案している。その「かた」は『刀金録・勢法篇（とうほうろく・せいほうへん）』に記されているが、その内



容を分析すると、それぞれの「かた」を、「しない打ち」的な稽古方法で行っていた感が窺える。つまり、この新陰柳生流も、玄流同様に社会的な影響を受け、そういった新たな傾向を取り入れていたものと考えられるのである。

こういった「しない打ち」稽古が、この時期に発生し始めたことは、この時期が尾張藩劍術の一つの転換期であることを意味すると共に、幕末から近代にかけての尾張藩劍術の発展を促す契機にもなったと考えられる。

#### 四 おわりに

今回の研究で明らかになった点は次の通りである。

- ① 時代の推移と共に劍術を意味する名称が変化し、分類が曖昧になっている。たとえば、近世初期の「兵法」と「劍術」という呼称は、「兵法劍術」や「刀術」といったものに変わり、また中期頃の「兵法」には初期の「劍術」の流派が含まれている。この様な背景には、折衷的な流派が現れたことと、他国から新たな流派が流入してきたことで、厳密なる分類が不可能になったことが挙げられよう。

- ② 近世初期には、尾張藩で生じた流派（新陰柳生流、円明流、制剛流）が主であった。これが中期頃になると、他国から流派が流入し、また新たな流派を開流しようとする動きがでてくる。これらの現象は、他の芸道においては家元制度が確立されており、安易に独立分派できない構造になっているのに対し、武芸の場合それが容易にできるといった特性に帰因しているものと考えられる。

- ③ 近世後期になると、尾張藩においても今までの稽古方法であった「かた」稽古の他に、「しない打ち」を用いた稽古方法を行う流派が現れた。これは、当時の一刀流系統の「しない打ち」劍術の影響を受けたものと思われる。また、この時期になると一刀流やその流れを汲む流派が流入してきている。このことは、近代における尾張地方の劍術様相を変える一要因になったものと考えられる。

なお、今回の研究では資料が限定されていたことと、流派の時系列的な変容を主眼としたため、各時期の流派間の横の繋がりを見ることができなかった。今後は、この時期の劍術の様相をより明確化する共に、

筆者のテーマでもある新陰柳生流が、他流派との関係のなかでどの様に展開、変容していったのかを見たいと考えている

—注—

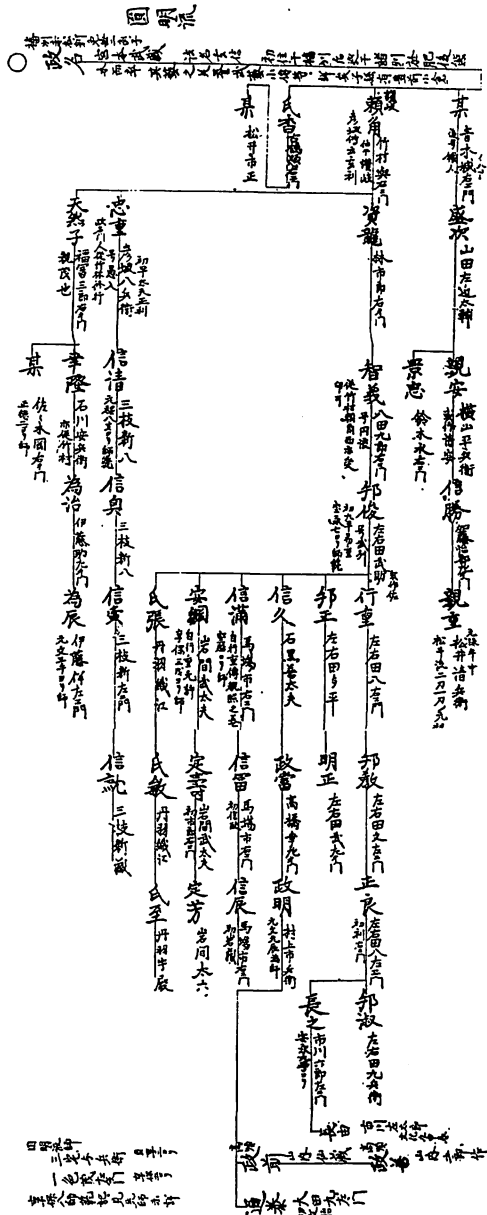
- (1) 『日本武道全集』第七巻 人物往来社 一九六七年  
三三八頁
- (2) 『武芸流派大事典』綿谷雪 東京コピー出版部 一  
九七八年 二六七頁
- (3) 蓬左文庫蔵
- (4) 『前掲書』(1) 三三八頁
- (5) 『同 右』 三四〇頁
- (6) 『同 右』 三四〇頁
- (7) 『同 右』 三三八頁
- (8) この頃には「制剛流」の名称が見られないが、この流はそもそも総合武術であったため、この時期には剣術の項には記されず、柔術の項に記されている。
- (9) 『前掲書』(1) 三四〇頁
- (10) 『同 右』 三四〇頁
- (11) 『同 右』 三四〇頁
- (12) 『張藩武術師系録』に武州出身と記されている。
- (13) 『前掲書』(1) 三四〇頁
- (14) 富永氏は『剣道に於ける道』の中で、奥平公重の

「神影流」を取り挙げ、その字義から時代の推移と共に「神陰流」と名称を変更したことを指摘している。

- (15) 『前掲書』(1) 三四四頁
- (16) 『前掲書』(1) 三五〇頁
- (17) 『前掲書』(2) 二六七頁
- (18) 『日本武道学研究』 島津書房 一九八八年 二〇  
四～二二八頁

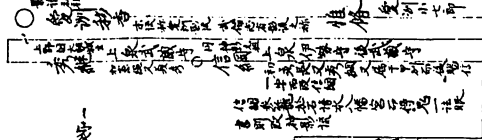
近世尾張藩の剣術に関する一考察

資料一



刀街 中野五郎

影之流 新流 新流 新流



宗治 柳生屋右子 時宗 柳生房弁  
 宗治 柳生屋右子  
 宗忠 尾田玄吉

柳生利盛 元祖  
 宗忠 柳生屋右子  
 宗短 柳生屋右子  
 利盛 柳生屋右子  
 宗次 柳生屋右子

一家 柳生屋右子 辰屋 柳生房弁

重貞 柳生屋右子 茂貞 柳生屋右子  
 芳光 柳生屋右子 芳南 柳生屋右子  
 信順 柳生屋右子 信實 柳生屋右子  
 清九 柳生屋右子 清九 柳生屋右子  
 政種 柳生屋右子 政種 柳生屋右子  
 李厚 柳生屋右子 李厚 柳生屋右子  
 李元 柳生屋右子 李元 柳生屋右子

宗冬 柳生屋右子 宗春 柳生屋右子  
 宗有 柳生屋右子 宗長 柳生屋右子  
 俊平 柳生屋右子 俊榮 柳生屋右子  
 俊則 柳生屋右子 俊則 柳生屋右子  
 宗冬 柳生屋右子 宗春 柳生屋右子  
 宗有 柳生屋右子 宗長 柳生屋右子  
 俊平 柳生屋右子 俊榮 柳生屋右子  
 俊則 柳生屋右子 俊則 柳生屋右子

吉勝 柳生屋右子 短明 柳生屋右子  
 伯明 柳生屋右子 短明 柳生屋右子

宗冬 柳生屋右子 宗春 柳生屋右子  
 宗有 柳生屋右子 宗長 柳生屋右子  
 俊平 柳生屋右子 俊榮 柳生屋右子  
 俊則 柳生屋右子 俊則 柳生屋右子

資料三

玄流 大太刀 兵法

大太刀術之中、鉞法、呂柄、步、業、屬ノ傳也  
近來大太刀ノ兵法二流ニ分テ相傳ノ師ニ  
亦有定勝ノ記也

○<sup>武外</sup>利寶 明堂見清也  
改訂 重勝 石黒三之丞  
重舊 石黒善太夫

舊度 石來清次郎

堅尻 高野瀨又左門 盛勝 高野瀨左一郎

貞房 吉田勘藏 某 吉田勘之丞  
○<sup>兵法分</sup>重采 吉田久之丞

大太刀 義郡 高橋鉄藏  
文化四年久光許  
同立原青柳館

正勝 服部榮治  
致信四水 ○<sup>兵法分</sup>正時 服部榮治

為治 大系平兵衛  
初 為忠 大系貞之丞

正弘 朝倉平藏  
初貞兵衛 正勝 朝倉貞兵衛

清定 村上五郎兵衛  
初万松